

追憶・田子の浦

高野敦志

追憶・田子の浦
あとがき

目次

追憶・田子の浦
あとがき

追憶・田子の浦

髙野敦志

僕は父が苦手だった。父は中学校で国語の教師をしていたが、休みの日は本棚に囲まれた書斎にこもって、詩を書いているときが多かった。いつも厳しい顔をしており、睨みつけられただけで、子供の頃は縮み上がってしまった。口数が少ない父は、母のことを「おい」としか呼ばなかった。「おい、お茶」「おい、飯」と催促して、母が口答えすることを許さなかった。

まだ若かった父は大酒飲みで、ひどい暑がりだった。風呂から上がると、バスタオルを腰に巻いて、庭を歩き回っていた。母が恥ずかしがるのもお構いなしに。普段は大人しい母が言い返すと、「この、おたんこなす」「くそったれババア」という怒号が響いた。家事は女の仕事と決めつけていたから、大掃除以外で父が手伝ったことはない。門限は午後六時と決められており、母が一分でも遅れようものなら、恐ろしい形相をして坂道を下ってくる。擦れ違った母と僕には目もくれず。飲み屋でぐでんぐでんになるまで酒を浴び、日付が変わる頃に戻ってくると、すぐに風呂に入りたがった。軍歌か演歌か分からない歌を、よく反響する浴室で絶唱するのだった。「髙野さん、かわいそう」と、母は近所の人たちに気の毒がられたそうだ。

父に手を上げられたことはなかったが、怒り出すと手がつけられない。小学四年生のとき、水泳を教えてもらうことになったが、市民プールに連れていかれる間、一言も口をきいてくれなかった。父が苛立っているのは確かだった。母に何か言われたのだろう。水着に着替えて、いざプールに入る段となった。「しょうがない奴だな」と言うが早いか、僕の首根っこをつかむと、ざぶざぶ雑巾でも洗うかのように、水の中に入れたり出したりした。水を怖がってる

から泳げないんだと言わんばかりに。鼻に水が入ろうが、水を飲んでしまおうが構わなかった。
「泳げない奴がいたら、小舟に乗せて沖で放り投げてくるんだ。そうすれば、死にたくないから、死に物狂いで岸まで泳ぎ着くんだよ」
　本当に泳げなかったらどうするのか。そんなことは考えなかったらしい。これが大日本帝国海軍の水練法だったかどうかは知らないが。幼い頃の僕にとっては、父は怖い存在であり、その感覚は成長してからも残っていた。日常はほとんど口をきくことがなく、「おはようございます」と「行ってまいります」「ただいま戻りました」という挨拶以外は、僕の方から声をかけることはなかった。何か相談しなければならないときは、母に仲立ちを頼むようにしていた。
　生徒たちからは「怖いけれどもいい先生」と慕われていたらしい。髪が豊かな頃は、結構二枚目だったようだし。一方で、近所の人たちや母の親戚には、父は暴君のように映っていた。父に対する反感は、大学生になる頃には、不思議と収まってきた。後ろ姿を見て育ったせいか、僕も文章を書くようになっていたからだ。自ずと深酒するようになり、父が暗い顔をしたり、怒りを内に含んでいるとき、どんな思いであるかが分かってきた。時には文学の話もするようになったが、すでに父は糖尿病と慢性肝炎を患っており、二人で飲み屋を回る楽しみは、ついに味わうことがなかった。
　詩を書き続けている点で、父に敬意を示すようにはなったが、父が出版した詩集は、ほとんど眼を通していなかった。父親とは乗り越えるべき存在であるのに、父が書いた詩を読んで感動してしまったら、自分が飛躍する機会が失われてしまう。頭では尊敬していても、気持ちの上では反発する意識も根強かったし。そのせいか、「この人といつまでつきあわなければならないんだ」と、成人してからも思い続けていた。父はやはり、乗り越えることが容易でない壁だったのだ。

　父の性格はどのように形成されたのだろうか。髙野邦夫は昭和三年神奈川県川崎市で生まれた。両親ともに静岡県富士郡（現、富士市）の出身で、技師だった父親とともに一家は移住してきた。三男だった父は、母親に似て読書好きの少年だったが、リュウマチを患った父親が急逝した後、神奈川工業学校に進学した。長兄は中国大陸に出征し、次兄はニューギニアに転戦していた。軍国少年だった父は、校長に勧められるまま三年で退学し、海軍甲種飛行予科練習生として奈良海軍航空隊に入隊した。戦闘機に乗って敵艦に体当たりするはずだったが、すでに飛行機を生産する余力はなくなっていた。

　父は戦争について語りたがらなかったが、父の友人が自宅に来た折などに、当時のことを脇で聞くことができた。工業学校で授業中に上級生が乱入し、「お国のために貴様は何ができるのか」と問われて、何と答えても「生意気だ」と一発ずつ殴られたとか。予科練に入ってからは、丸太で腰を叩く「精神注入棒」の話や、役にも立たない手旗信号を覚えさせられて、今でも忘れずにいるとか。玉音放送の後に、将校に「今後は貴様たちに期待するぞ」と激励され、次々に顎を乱打されたとか。

　復員した父は、母ことが疎開していた元吉原村大野新田の実家にしばらく滞在し、漁師の地引網を手伝って過ごした。山部赤人の「田子の浦ゆ うち出でて見れば 真白にぞ 富士の高嶺に 雪は降りける」で知られる歌枕の地である。現在は富士川の東側を指すが、古くは西側の由ゆ比いあたりの海岸を指したらしい。

　川崎に戻ってからは、しばらく荒れた状態が続くことになる。予科練への入隊を勧めた校長が、戦時中に京都を旅行していたとか、民主的な教育を導入するために、アメリカに渡るとか聞いたからだ。「お国のために死ね」と教育してきた男に、国家の非常時に遊興していたこと、戦後の変節ぶりなどを問い詰めると、「君、これからは民主主義の時代なんだ」と切って捨てられたことに、はらわたが煮えくり返る思いがしたのだろう。

　床についても眠れず、無性に酒が飲みたくなる。「今頃どこへ行くのかえ」という母ことの声を、ぴしゃりと玄関の戸で遮った。寒

風が吹きすさぶ中、裸足に下駄を突っかけて、駅裏の酒場へと急ぐと、予科練の練習生が脱走したという幻聴が聞こえてくる。すっかり変わった人心にいきり立ち、焼酎をぐいと飲み干すと、いったんは胸のつかえが取れた気がするが、居合わせた客が吐いた言葉にかちんと来て言い合いとなる。夜が明けても、酔いは一向に醒さめてこない。空風に当たろうと街路樹によじ登り、アメリカ崇拝に宗旨替えした奴らを睥へい睨げいする。

　次兄はニューギニア東部で戦死した。長兄も華北で消息不明となる。三男の父だけが帰還していた。残された母と姉、妹は、酒に溺れて荒れる男の扱いに手を焼いた。姉にとがめられると、手元にあったインク壺を投げつけて、姉の着物を台無しにした。やがて長兄が復員する頃には、自動車工場の板金・溶接工を皮切りに、小学校の代用教員などを経て、日本大学を卒業後、中学校で国語を教えるようになる。

　荒れた生活と縁を切るきっかけとなったのが、詩を書くことだった。最も多感なはずの時期に、学ぶ機会を奪われた父は、自らも学ぶことができる教師の仕事こそが、詩を書くことに近づく方法だと考えた。ただ、何を書いたらいいのか分からない。昭和一桁の父にとって、予科練での体験は忘れがたい記憶ではあったが、大正生まれの世代とは大きく異なる点があった。すでに成人して人生の意味を考え、命を断ち切られる恐怖と戦い、多くは戦場で無残な死を強いられた。生き残った人間の一部は、死刑執行を免れたドストエフスキーのように、生と死の境界を実感して、文学の言葉として定着させていった。特攻の命令を受けながら、出発は遂ついに訪れなかった島尾敏雄も然しかり。死線を突破した強烈な体験こそ、文学を生み出す原動力となるのだが、父は予科練の練習生のまま、戦場に送られることはなかった。漠然と死を予感した日々からすれば、不発弾のまま帰還させられたことになる。詩を書くためには、生命の燃焼こそが必要なのに。父は焦燥を覚えては酒を飲み、自身を苦しみへと追い込む道を選ぶことになる。

　父邦夫は三十三歳のとき、処女詩集『寒菊』を出版した。青春の終わりを心に刻み込むために。生涯添い遂げたいと思うほどの純愛

が、酒癖の悪さを知られたせいか、発展することなく遠ざかっていった。不発に終わった恋の顚てん末まつをつづった詩集は、思い入れにもかかわらず反響が乏しかった。意気消沈していた父は、勧められた見合い相手と結婚した。女中と婆やがいるという家に、婿同然で入り、僕が生まれたわけだか、気丈な義母にやり込められ、下男扱いされたとぼやく日々。飛び出そうと決意したとき、「ついてこなくていい」と言い渡した妻は、息子を抱えてついてきた。やがて娘も生まれるのだが、詩を書くことを天命だと感じていた父は、何よりも詩作を優先し、妨げとなる日常生活に憤りを覚えた。父があのような性格になった理由の一端は、お分かりいただけただろうか。

　僕はなぜか父のことを、生前から追憶していた。それだけ自分にとって、遠い存在だったからだろうか。いや、父が夾雑物を削ぎ落とした、象徴的なイメージだったからだろう。父と初めて遠出したのは、自分がまだ幼稚園児の頃だった。富士市大野新田の家で祖母の兄が危篤になり、父と伯母がお別れに行くことになった。「ついてくるか」と問われ、わけも分からずうなずいた。夏だったので、母は海水パンツの準備までした。おばあちゃんが生まれた家も見たかったし、電車で遠くに行けるというので、出かける前からはしゃいでいた。

　東海道本線の旅は長かった。空は曇っていたし、父と伯母は向かい合っていたが、ほとんど口をきかなかった。長い鉄橋を渡りながら聞こえる、線路のつなぎ目で響く振動は、延々と続くように思われた。トイレの中に入ると、便器の穴から線路の枕木が見えた。目まぐるしく流れる路盤に、小便がまき散らされていくのを見つめていた。

　吉原駅に近い祖母の実家は、とてつもなく広かった。大きな座敷がいくつもあり、彼方にある塀まで庭が続いていた。見知らぬ親戚の人たちが、囲炉裏のある部屋に集まっていた。重い木の戸を隔てた向こうには、息を引き取りつつある老人がいるのだろう。十分ほ

どすると、次の人がお別れに入っていった。僕はじっと我慢しているしかなかった。様子を察した父が、海に行こうと言ってくれた。松林の中を進んでいくと、潮の香りがして砂浜が見えてきた。その先には灰色の海が拡がっていた。製紙工場の排水で濁っており、波打ち際には板きれが打ち寄せられていた。海水パンツは荷物の中だったし、寒々とした物寂しい眺めに、当てが外れた思いがした。

　砂浜の脇には墓地があった。先祖代々の魂が、海を眺めながら思い出にひたっているようだった。父は無言のまま、沖を見つめていた。祖母が見て育った美しい海、終戦の頃、地引網をした浜の面影はすでになかった。僕はそのとき、子供ながらに父という存在を感じた。この人はよそのお父さんとは違うんだ。目の前に見える景色の、さらに奥にあるものまで見ているんだと。

　僕は砂山に駆け上ったり、弧を描くように走ったりした。我に返った父は、息子である僕の方に目をやった。立ち止まって見たのは、波の花だった。打ち寄せるたびに舞い上がる泡が、風にあおられて不思議な動きをしていたからだ。

「これ、生きているのかな」

　息子の問いかけに、父はようやく笑みを見せた。近くにいるのに、いつも遠くにいるように感じるこの人が、僕のお父さんなんだと思った。小学校に上がる前の記憶を、これほど鮮明に覚えているのは、父という人間の存在を、このとき初めて実感したからだろう。

　祖母ことは夫亡き後、得意な和裁で家計を支え、隠居してからは好きな読書に時を費やした。『源氏物語』などの古典文学も、現代小説のように読んでいた。喜寿を迎える頃に手術を受けて、麻酔の影響からか認知症を発症した。ある日、近所の糸屋に出向いた後に、川崎の自宅がどこにあるか分からなくなった。人に聞けばいいものを、気位が高い祖母にはそれができない。次の角で曲がればうちに着くはずだ。次の角を曲がれば、と思いつつ、あるときは六郷橋を渡って蒲田まで、あるときは鶴見の先まで行ってしまった。日

が暮れても歩き続け、力尽きるとしゃがみ込んだ。連絡を受けた父も捜しに行ったのだが、店の軒先で背を丸めた老母を見つけて声をかけると、目を大きく見開いて、いかにも嬉しそうな表情を見せた。
「迎えに来てくれたのかえ」
　どうしたんだよという問いには応じず、工場の明かりが大層美しかったと、目を輝かせて答えた。道に迷っていたのも忘れてしまったのか。帰りがてらに、ふと思いついたように尋ねた。
「おまえは何でも知ってるから、一つ聞いてもいいかね。私は死んだら地獄に行くのかね、極楽に行くのかね」
「何も悪いことしていないから極楽だろ」
「そうかね、極楽かね」とほっとした様子でうなずく。
　やがて、認知症の症状は悪化していき、自分のうちはここではないと、言い張るようになった。「母さんのうちはここだろ」と父が言っても聞かない。座蒲団を抱えて「お邪魔しました」と立ち上がる。やむなく父は手を引いて、家の前の通りに出た。「その先に行けば、海が見えるはずだ」と、足を引きずるようにして急ぐ。実家にほど近い、田子の浦の浜辺にいるつもりなんだろう。「おかしい、おかしい」と首を傾げる老母をなだめて、川崎の家に連れ帰るしかなかった。そのときの出来事を、父邦夫は母ことの死後に詩の形で残している。

海

街中で海などあろう筈もないのに　毎日海を見ているという。渚に座って波の音を聞いているという。母の妄想が悲しくて　私は母を連れ出して通りへ出た。

老いた母の歩みがいたましくて　私はすぐ後悔した。もう帰ろうと母の手をひいたが　もう少し歩けば波の音が聞こえる筈だと　母は意外に強情だった。

あの道のむこうには本当に海があったのだと今は思う。あれをその儘にうなずいておられなかった小さな知恵が　今は悲しい。

眼を瞑れば　あの街を削り　あの道を洗い

清浄の海が深い碧をたたえて拡がっているよ

うな気がする。終日幼い心に還って海を視つ

めていた　老いた母の姿が胸に迫って来る。

　人間は死期が近づくと、故郷に帰ろうとする。自分が生まれた家に、今は亡き家族が集う懐かしい家に。幼い頃遊んだ浜辺に、生命の源である海に。今まで積み重ねてきた歳月を、死が奪い去ることを予感しているからこそ、童心に返ることで、人生を追憶の光に溶け込ませようとするのだ。

　父邦夫は自身を苦しみへ追い込む道を選んだわけだが、教員の仕事に結婚による家庭生活が加わると、詩を書くために言葉と格闘する時間は、さらに確保が難しくなった。睡眠時間を削るしかないわけで、胸苦しさに襲われると、酒を飲んでは胃薬を乱用するようになり、健康はさらに蝕まれていった。自身を痛めつけなければ、命ある言葉を紡つむぎ出せないという信念に、取り憑かれていたからだった。

　ある日、自宅前の階段から転落し、頭にできた傷がいつまでも治らないことから、糖尿病と慢性肝炎を発症していることが分かった。しばらく入院生活を送り、暴食は控えるようになったが、酒をやめることは難しかった。

　泥酔して歩けなくなり、バス停から電話をかけてきたこともあった。母と高校生の僕が迎えに行き、父の腋わきに腕を入れて支えよ

うとすると、我に返った父は「気をつけ」の姿勢を取り、よろよろしながらまっすぐ立とうとした。父親としての沽券に関わるとでも言わんばかりに。
　糖尿病と慢性肝炎は、しばらく小康状態が続いたが、五十代半ばの夏に、股関節に激痛を覚えて歩けなくなった。母と僕で両脇から支え、タクシーで大学病院に連れていった。レントゲンを撮ると、不思議と痛みはなくなり、帰りは自分で歩いて帰った。Ｘ線が患部に巣くっていた病原を、一時的に抑え込んだようだった。
　原因が分からないまま入院し、精密検査を行ったのだが、一向に診断はつかなかった。そのうち、腫れは全身に拡がっていった。敗血症の前兆だった。そこで、炎症した股関節を切除することで、一命を取り留めることができた。それからは、二本足では歩けなくなった。当時はバリアフリーもなかったから、松葉杖で痛みに耐えながら、駅の階段を上って職場に通っていた。
　人工関節の権威がいる病院を紹介され、手術の結果、杖なしで歩けるまでに回復した。数年後、腫れがひどくなり、人工関節を取り出して、一本杖で歩けるようになったが、片足が短くなったのが我慢ならない。「再手術をしなければ裁判を起こす」と息巻いたので、主治医はしぶしぶ人工関節を入れたのだが、足の長さは元のようには戻らなかった。
　不運はさらに続いた。伯母の通夜の日、小雪が舞うほど冷え込んでいた。開け放たれた座敷の祭壇を前にして、父は喪服姿で震えていた。実の姉の死を弔う日に、コートを着たり、奥でストーブに当たったりすることを、自らに禁じたからだった。腎臓の機能は急激に低下し、一年後には人工透析を受けるまでになった。一時体調を取り戻したかに見えたが、階段から転落したことで、人工関節を取り外すために、再入院を余儀なくされた。
　手術は成功したかに見えた。ところが、麻酔の影響で意識が混濁し、ベッドから起き上がって転落しそうになった。入れ替えたばかりの人工関節は外れてしまい、体を押さえて股にはめこんでもらったが、傷口がなかなかふさがらず、膿うみを出すためのカテーテルにつながれた。さらに、院内感染にせいで、午後になると発熱する

ようになった。関節の出血が止まると、松葉杖で歩けるようになったが、ニコチンの禁断症状に耐えられず、喫煙のために廊下に出るたびに転倒し、外れた人工関節を激痛に耐えながら入れ直してもらう日々。

　自身の体が壊れていくのを感じていたらしい。父は僕の顔をまじまじと見つめて言った。文章を書くようになった息子でなければ、分かってもらえないと思ったのだろうか。

「艱かん難なん辛しん苦くを与え給えと言ってたら、こんな体になっちゃったよ」

　艱難汝なんじを玉にすという言葉もあるように、死線を突破することで、文学の言葉は光を得るわけだが、それはあくまでも、健康な体で生還することを条件とする。父は晩年、あらゆる病魔に襲いかかられ、たとえ生と死の境界を意識したとしても、それを言葉で表現する時間がなかった。

　やがて、父は幻覚に襲われるようになった。見舞いに行った日、父を車椅子に乗せて、気晴らしのために病院内を連れて回った。受付の終わった外来の待合室は、電気が消されて薄暗かったが、ガラス窓から差し入る午後の光は、明るい外の世界を印象づけていた。自然光に照らされた壁の絵画は、美術が好きだった父の気持ちを和ませるはずだった。閉ざされた出入り口のガラスを眺めていたときだ。

「あっ、母さんだ、母さんがいる……」

　父がつぶやいた。ガラスの表面に何かが映って、亡くなった母ことの姿に見えたのだろう。どうしたのと問いかけると、我に返った父は「いるような気がしただけだ」と答えた。人間は死期が近づくと、先立った家族が迎えに来るらしい。死者の魂が現れるかどうかは別として、死を意識するようになると、亡き家族との再会という形で、死を受容しようとするのだろう。

　何度も外れた人工関節は、ついに壊れてしまった。すでに入院は九ヶ月に及んでいた。車椅子の生活で我慢するなら、そのまま退院

することもできたが、週三回の人工透析で命をつないでいる父にとって、通院するには再手術を受けなければならなかった。心身ともにすでに限界に達していたのに。
　手術後、一時的に正気を取り戻したが、それは家族と最後の別れをするためだった。またもや意識が混濁して、暴言を吐いて暴れたため、強力な鎮静剤を注射された。それからは、ほとんど一日中眠ったままになった。
　死ぬ三週間ほど前、父は「どんどんレベルが落ちていく」とつぶやいた。病室の中に坊さんがいるとも。最後に口にした言葉は「残念だ、残念だ」だった。誤ご嚥えんを防ぐために、食事をとることは医師から止められていた。点滴ではブドウ糖しか補給できないため、鼻から食道へパイプを通し、胃から栄養液を吸収させることになった。しかし、時すでに遅く、消化する機能はほとんど失われていた。
　蛋白質を摂取できなくなると、血管がもろくなってきた。水分が全身にたまって、呼吸も苦しくなってきた。透析をする際に、除水することで肺の水分はかなり引けたが、何時間かするとまたむくんできた。医師は人工呼吸器をつけることを提案した。自分自身の呼吸とぶつからないように薬で眠らせ、意識を完全になくす必要があると。それをしても、延命効果しかないと言われた。
「お父さんは、そんなこと、望んでいないよ」
　危篤の知らせで見舞いに来た親戚の人々は、口々に言っていた。呼吸を楽にしてあげたかったが、苦難と正面から向かい合うことを選んだ父にとっては、死に至るまで病苦と闘うことが、一生の終わりの仕事となった。
「もう心臓が持たないだろう」と医師に告げられた。最後の人工透析を受けたが、痰がからまって苦しそうにしている。看護師に痰の吸引を行ってもらったが、血が混じっていて痛々しかった。心拍数が乱れて、不吉な警戒音が鳴り出した。ベッドを囲んだ人々は目を覆った。
　僕にできることは、父を少しでも楽に逝かせてあげることだった。カセットテープでリラックスできる音楽を聞かせることにし

た。「星に願いを」はディズニーの映画『ピノキオ』の主題歌で、「輝く星に心の夢を祈れば、いつか叶うでしょう」という歌詞がついている。父が大好きだった母ことと、再会する夢でも見てもらえればと思ったからだった。

意識がないように見えても、耳の機能は最後まで残っているらしい。二人きりになったとき、昔、一緒に大野新田のうちに行ったことや、田子の浦の海岸を歩いたことを話した。これから自分がどんなことをしようとしているかも。手を握ってあげると、眠っているように見えたが、不思議と握り返してくれた。力が残っていたので、まだ生きられるかもしれないと思った。顔をのぞき込むと、むくんで細くなった目が開いた。食い入るようなまなざしで「俺は死ぬのか、負けてなるものか」と必死に抵抗しているように見えた。しかし、夜になるとその力もなくなり、瞬きすることもできなくなった。

職場から駆けつけたとき、母と妹のほか、親戚の人が数人来ていたが、病室の中は静まり返っていた。少し開けられた窓からは、春の穏やかな日差しが差し込んでいた。昨日まで聞こえたピッピッという心拍数を示す音もなくなり、平和な空気に満たされていた。ようやく苦しみから解放された、という安あん堵どの気持ちの方が大きかった。ベッドに近寄り、白い布を外して父と対面した。
「お父さん、逝っちゃったのか」という言葉が漏れた。父が死んだということが、いまだに受け容れられずにいた。父は眠っているように見えたが、二度と目を開くことも、口をきくこともないのだ。父は両手の拳を顎のところにやり、上半身を縮こまらせるようにしていた。母ことのお腹にいた頃のような姿で、死という断絶を乗り越えようとしていたのか。

若い頃の僕は不遜にも、「この人といつまでつきあわなければならないんだ」と思ったものだが、人生の折り返しとも言うべき三十半ばで、ついに別れの時を迎えたというわけだ。いざその日が来てみると、余りに父について知らないことに愕がく然ぜんとした。

もっと多くのことを聞いておくべきだったのに。
　とはいえ、人の死によって知ることも多いのだ。通夜の日は親類や教え子が多く集まり、父の魂もさぞ喜んでいるだろうと思った。数十年の付き合いがある教え子も、遠方から駆けつけてくれた。
「学生の頃はお金がなかったから、よく先生について回ってお酒を飲ませてもらった。いつかは自分が偉くなって、先生のことを髙野さんって呼びたいと言ったら、このバカって言われたけどね。中学の頃はよく殴られたものだよ。自分にとっては最後まで先生だったな」と話していた。
　長らく音信が途絶えていた父の旧友は、祭壇の前に倒れ込むようにして、「髙野さん、申し訳ない」と涙を流した後、通夜の宴で父の詩について語ってくれた。
「ああいう詩を書く人は、今の日本にはいないんじゃないかな。普通の人が分かるような詩を書けば、って話したんだけど、詩は自分のために書くんだと言っていた。そして、あの言葉の使い方の厳格さ。言葉をぎりぎりまで削ぎ落としていくところ。もっと売り込んでいっても良かったんだろうが、そういうことは一切やらなかった。お父さんは本当に侍のような人だったんだよ」
　父は詩を書くことに一生の大半を費やした。詩は一部の人の目にしか触れなかったかもしれないが、自分を追い込んで書いていく姿勢、最後は満まん身しん創そう痍いとなっても、歯を食い縛って耐えていた姿勢は、昔の日本人が持っていた精神を感じさせた。社会人になって、ようやく和解できたといっても、父について知らないことばかりだった。通夜に集まってくれた人々と語らうことで、父の未知の側面に触れることができた。まだ目を通していない詩集を読むことで、父の内面をもっと理解したいと思うようになった。

　五月の連休に、僕は一人きりで三十年ぶりに、父と訪れた田子の浦の海岸に向かっていた。当時と異なるのは、空が青く澄んでいるということだ。大気汚染も緩和されてきたのだろう。東海道本線の吉原駅で降りて、大野新田に出ようと思ったのだが、地図を見ても

よく分からない。そこで、走ってきたタクシーに乗り込んだ。
「子供の頃に見た面影を追ってきたんですよ」
「マリンプールができてから、すっかり変わってしまいましてね」
　タクシーに降ろされたのは、休業中のプールの手前だった。大野新田はもっと西側なのだろう。松林の中を進んでいくしかなかった。祖母が生まれた家も建て直されたらしく、当時を偲しのぶ面影はなかった。林の間には墓地が続いていた。一族の墓もその中にあるんだろう。あの家で生活していた人の多くも、今は風となって大空を漂っているはずだ。松林を通り抜けると、巨大な防潮堤が立ちはだかった。こんなものは当時はなかった。東海地震の発生に備えて、田子の浦の一帯を万里の長城のような堤防で仕切ったのだ。
　幼い頃の記憶では、松林の先は一面の砂浜で、小さな砂山を下ると、一気に波打ち際の先、灰色の海までつながっていた。松林と砂浜、海の一体感は失われてしまった。かつてのような豊かな砂はなく、無愛想なコンクリートの壁を越えると、わずかな砂と砂じゃ利り、波消しのブロックの山があるばかり。製紙工場の汚水は薄まり、青く拡がる駿河湾に、春の暖かな日差しが降り注いでいる。すべては思い出の中にあるだけで、余りに長い歳月が流れてしまった。幼い自分が父の後ろ姿に、初めて父親というものを感じた映像も、脳裏にとどまった残ざん滓しに過ぎないのだろうか。
　その時その場所での出来事は、人間の意識に刻み込まれるだけで、それを知る人間が死んでしまえば、もはや存在したことすら定かではない。ただ、文字で記しておくことで、場面を再現することは可能なのではないか。祖母の魂も父の魂も、もはやこの世のものではないが、二人が再会の喜びにひたった情景を、追憶するように描き出せるのでは……。
　そう考えたとき、目の前からコンクリートの防潮堤は消えた。秋晴れの浜辺には、地引き網を引く漁夫に混じって、まだ五十過ぎの祖母ことの姿があった。村の子供も網につかまり、今夜のおかずは何の魚かと、目を輝かせている。網の中では鰯や鯵が青い鱗うろこを日の光で輝かせ、生命の滾たぎりをピチピチみなぎらせていた。
　ことが額の汗を腕でぬぐうと、背後にそびえる富士がうっすら冠

雪しているのが見えた。そのとき、男の子が「兵隊さんだ」と叫んだ。松林を抜けて現れたのは、復員したまだ十七歳の邦夫だった。

「帰ってきたんだねえ」

　ことが言うと、「ただいま」とだけ答えた。漁夫たちも「ご苦労様です」と口々に答えた。邦夫は恥ずかしげに頭を下げると、自身も地引網に加わった。

あとがき

小説と随筆の違いは何だろう。小説といっても随筆風のタッチで描かれたり、随筆であっても会話が挿入されたりする。場面の描写があれば、小説と判断されるのだろうが。

井伏鱒二はその違いについて、「フィクションが入っているかだ」と、文体論学者で私の恩師である中村明先生に答えたそうだ。中村先生がさらに聞き出そうとすると、「原稿料の差だ」とお茶を濁されたということだ。

私は以前、「海に帰る日」という小説で、父邦夫と祖母ことのことを書いた。小説では英夫といという名前になっているが。故人である二人から聞き出せなかったことは、空想で表現するしかなかった。

随筆の場合、長編小説でしか扱えないような内容でも、短い文章で表すことができる。そうした充足を味合わせられるのが、すぐれた随筆なのだそうだ。今回私は随筆のスタイルで書き始めたのだが、結末には復員した父邦夫と、祖母ことの再会する場面を配置した。再会の場が田子の浦であることは事実だが、どのような状況だったかは、フィクションで補わざるをえなかった。その点から言えば、この作品は随筆と小説の折衷的な意匠で書かれたということになる。

二〇二二年三月十二日

髙野敦志